

## 平成 30 年度第 1 回青森市民図書館協議会会議概要

- 1 日時 平成 31 年 2 月 26 日(火) 14 時 00 分～15 時 16 分
- 2 場所 青森市民図書館 8 階会議室 2
- 3 出席委員 伊東暁生、蝦名理佳、遠藤浩一、秋元美香子、中園裕、秋谷進、  
工藤宏、柴田章二（8 名）
- 4 欠席委員 安田聡子、伊藤理子（2 名）
- 5 事務局出席職員 館長 伊藤慶尚、室長 工藤大輔、主幹 葛西孝徳、  
主幹 村上泰子、主幹 中村篤、主査 白濱舞子、主事 渡邊世梨華
- 6 傍聴者 なし
- 7 次第

### (1) 平成 30 年度第 1 回青森市民図書館協議会

開会

会長あいさつ

報告事項

- ・青森市民図書館の開館時間の変更について
- ・平成 31 年度の青森市民図書館運営について  
(配付資料をもとに事務局より説明)

その他

閉会

### 8 主な質疑応答、意見等

- ・青森市民図書館の開館時間の変更について

《委員》

午後 9 時までの 1 時間など、これまでの利用状況はどうだったのか。

《事務局》

平成 29 年度の入館者の 1 日平均は 1,500 人ほどであり、20 時以降の入館者は 21 人である。今年は 1 月末現在で、入館者の 1 日平均が 1,500 人ほどであり、20 時以降の入館者は 20 人である。一方、8 月と 1 月の 9 時開館時の 9 時から 10 時までの入館者は、平成 29 年度が 1 日平均 120 人ほどであり、今年は 119 人ほどである。夜間の利用が少ないことや早い開館を望む声から、開館時間の変更について判断したものである。

《議長》

利用者数を見ても、利用者のニーズに十分に対応しているということか。

《事務局》

そのように考えている。

- ・平成 31 年度の青森市民図書館運営について

《委員》

六ヶ所村でレファレンス事業やカフェコーナーの設置、読書ノートの感想文の 3 つの事業に司書 5 名を増員して実施しているようだが、市民図書館においても新しい事業の展開は考えていないのか。

《事務局》

全くの新規ではないが、これまで市民センターに対して司書派遣していたが、来年度は保育所等に出向き、読み聞かせ等を充実させていくことを考えている。

《委員》

P T Aの立場から、予算措置に関わることからすぐはできないと思うが、読書通帳を導入することによって、子どもたちの図書に対しての触れ合いや、電子機器ではなく図書によって学ぶ機会を提供するため、市民図書館でも取り組んでみたらどうかと思う。参考までに提言する。

《委員》

小・中学生を対象に本の感想文を募集し、それを毎回審査して表彰するような事業がよいのではないか。

《事務局》

読書感想文は、図書館では行っていないが、教育委員会の事業として実施している。

《委員》

図書館と提携してもいいのかもしれない。

《委員》

蔵書数が 20,000 冊ぐらい増えているが、そのうち新刊の割合はどの程度か。

《事務局》

古い本を理由があって買う場合はあるが、基本的には新刊を買っている。なお、20,000 冊の中に寄贈された図書は含まれていない。

《委員》

新刊書を広報する事業は実施していないのか。

《事務局》

特にそのような事業は実施していない。

《委員》

ホームページを新しくする際に、新刊書を P R できる形にしてはどうか。

《事務局》

新刊書の紹介は現在もホームページに載せている。

《委員》

平成 31 年度のボランティア募集（ライブラリーフレンズ、リユース・ボックス）について、何人程度の募集か、司書資格がなくても可能なのか、原則無給だとは思いますが、交通費、食事代等も支給しないのか、研修等は実施しないのか、年齢制限はあるのか。

《事務局》

ライブラリーフレンズは、今年度 82 名の方が活動している。活動内容は、児童サービス、さわる絵本等の目の不自由な方向けのサービス、資料整備の 3 つの部会があるが、特に司書資格がなくてもできる内容となっている。全て無報酬で、ライブラリーフレンズに関しては、自分たちで活動費を負担してもらっている。リユース・ボックスに関しては、活動費はない。研修については、ライブラリーフレンズに関しては、児童サービスの場合、市で開催している「おはなし・読み聞かせ講習会」を受講・修了して活動し

ていただいている。また、活動費で外部講師を招くなどして研修を実施している。年齢制限については、ライブラリーフレンズに関しては、18歳以上で、大学生の方もいるが、リユース・ブックスに関しては、成人に限っている。

《議長》

学校の図書館運営については、おはなし会も含め英語の堪能な保護者が英語の絵本を読みに来たり、図書室の環境整備等、参加意識を持った保護者の方たちに助けられていることから、それらを発信していくことも大事だと思う。

《委員》

デーリー東北の2月24日の記事で、八戸市立根城中学校において図書ボランティアを対象にした、八戸ブックセンターの専門員によるワークショップが開かれ、お互いに意見交換をしたとあった。このように活動内容を広報することで、広く周知され、ひいては後継者づくりにも役立つと思う。

また、そろそろ平成の大合併の検証の資料が必要かと思う。研究書のレベルでもなく、本も出版されていないが、合併してからだいぶ時間が経過しており、研究者や関心のある学生たちのために、旧青森市と旧浪岡町の合併に関して、新聞記事のスクラップや雑誌等だけでも収集して用意しておいたほうがよいと思う。

《事務局》

図書ボランティアがいない小学校に対しては、先生やPTAの方と一緒に活動するなど、学校との連携も少しずつ手がけている。

《委員》

小学校の本の修繕ボランティアや読み聞かせのボランティアはよく見かけるが、中学校に対しても、小中一貫教育の中で、中学生から小学生に対して何かしらやるような形もよいのではないかと思う。

《委員》

現在、子育てに関する本が7階のくらしのコーナーにあるが、子どもと一緒に来館された保護者のために児童ライブラリーの一角にそれらの本を置くことはできないか。

《事務局》

今年度途中から、おはなしの部屋のすぐそばに子育て応援の本を集めた展示コーナーを作ったところである。

《議長》

実施しながら、改善するところがきっと出てくると思うことから、その際はお願いしたいと思う。

《委員》

郷土作家コーナーについて、ホームページに掲載するなど、さらに充実してもらいたい。

《委員》

自分史の発行に際して、図書館に手伝ってもらえるものか。

《事務局》

具体的な相談はないが、自分の先祖や地域の歴史に関する問い合わせが多く、可能な範囲で対応している。

《委員》

県では、全国からそういった話があるが、プライベートの話に関してはお断わりしている。ただ、ここ数年でそういった問い合わせが多く、今後も増えていくのだろうと思う。

《事務局》

原稿を書くためのある程度の手伝いはできるのかもしれないが、出版となると図書館の範疇ではないと思う。

《委員》

自費出版だと 200 万円かかるので、助成金等については、県や市ではなく、しかるべきところに質問していただきたい。自分史の書き方等については、青森市の泰斗舎という出版社やNHKの文化講座等でも情報を得られると思う。